

# おはなし散歩道 山守りになつた弥彦

江東区 富樫 あい子

昔のはなし。収穫も終わり、

弥彦の家は、棚に干したマメ殻がいろり火に落ちて火事になった。冬が来るのに家と家財を全部燃やしてしまった。

「弥彦も大変だなあ」  
村の人たちはあわれんだ。結婚して邦彦という男の子が今年、生まれたばかりだった。

「家族が無事でなによりだ。命さえあれば何とかなる」  
弥彦は、力強くいった。  
「そうですね」  
無一文になったが、妻も家族の無事を喜んでいた。

そこへ、庄屋がきた。  
「弥彦よ。火事で更地になった土地は返してもらおう決まりだ。分かっているな」  
「庄屋さん。待つて下さい」  
追いかける弥彦の声など聞く耳もない。庄屋は振り向きもしないで帰った。それを聞いた村人は庄屋に腹を立てたが面と向つて言う者はいない。「ひでえ、庄屋だ！ 人情の



「おらあ、自分の炭焼き小屋がある。なんとか住めるだ」  
「一時、おれの家に来いや」  
仲間はいう。だが、弥彦は断った。

「あんな雪深い山奥で、赤子を抱えてどうするだよ」  
「この際、人の好意をうけられたいのによお」  
村人はいう。  
「まあ、弥彦のことだ。何か思ふことがあるのだからよ」  
見守る村人の声もあった。

「苦しい時はお互い様だ」  
村人は越冬用の食料や鍋釜を持ち寄つて三里(約十二キロ)もある山奥の炭焼き小屋まで送つてくれた。  
「熊に気をつけろよ」「火を絶やすなよ」「雪崩にもな」と声をかけてくれた。そこは炭焼き小屋に続く六畳ほどの番小屋にいろりが一つあった。

その夜、夫婦は山神様に灯明をあげて山に住まわせていただくお願いをした。  
「雪が降らないうちに外仕事を済ませないとなあ」  
「そうしましょ」  
翌日から弥彦は炭にする雑木を切りに、妻は赤子を背負つて木の実を取りに出かけた。山に雪が降り始めると、炭焼きが始まった。夫婦は毎日、真つ黒になって働いた。

数年間は、無我夢中で弥彦夫婦は雑木を切りだし一生懸命に炭を焼いた。子どもは炭焼き小屋を遊び場にして元気に飛び回っている。  
何とか炭を売つて生活が出来るようになってきた。  
「いずれ家を建ててやるぞ」  
「邦彦の為にね」  
と妻が板戸をあけて雪解けの

# 第二〇二回 高尾山信徒峰中修行会 十一月十九日(土)～二十日(日)

向寒の高尾山へ一泊し当山独自の滝行をはじめ、月輪観・写経・法話の聴講等を実修する精神修養の行事として【高尾山信徒峰中修行会】を来る十一月十九日～二十日に開催致します。

高尾山に広がる大自然全体を修行道場として、高尾山御本尊・飯縄大権現様に身をまかせ、古来より伝承される修行の方法を実修して、激動の現代社会に生きるご自身の心の波を静めてみませんか？  
もちろん老若男女を問わず初心者の方も歓迎致します。

参加ご希望の方は、ハガキに住所・氏名・年齢・性別・生年月日・電話番号を明記してお送りください。  
皆様方のご参加をお待ち申し上げます。  
※お電話にての申込はご遠慮ください。  
※請書は、受付次第、随時発送致します。 合掌

日程表	
11月19日(土)	20日(日)
8:00 高尾山麓不動院集合・受付	4:30 起床
8:30 開会式	5:00 月輪観
9:00 日程説明 修行についての心構え説明	6:00 朝勤・諸堂参拝
11:00 昼食(各自持参弁当)	7:00 朝食
11:30 回峰行	8:00 写経
12:30 両滝にて水行 ※男女で分ける	10:00 法話聴聞
14:30 両滝道場発足/仏舎利にて合流	12:00 昼食
15:30 葉王院到着	13:00 下山
17:00 千巻経	15:00 柴燈大護摩
18:00 夕食	15:30 閉会式
18:30 風呂	
20:00 ディスカッション	
21:00 消灯	

宛先 〒一九三二八六八六  
八王子市高尾町二、一七七番地  
高尾山信徒峰中修行会係宛  
電話 〇四二六六二二二五  
FAX 〇四二六六四二九九  
申し込み締め切り  
十月三十一日(月)  
参加費 大人 一万五千元  
子供 一万円(※電車下)  
申込み後、キャンセルの方は、早めに電話連絡を入れて下さい。連絡なきキャンセルにつきましては、キャンセル料等がかかります(発生する)場合がございますので、ご了承下さい。

集合場所 高尾山麓不動院  
午前八時集合  
服装 運動着、運動靴  
\*登山靴可  
持参品 弁当(初日昼食分)、  
雨具(カッパ、ポンチョ)、  
洗面用具、タオル、寝間着、  
小ぶりのリュックサック、  
筆記用具  
\*お持ちの方は、念珠、  
錫杖をご持参下さい。

「雪が降り始めると、炭焼きが始まった。夫婦は毎日、真つ黒になって働いた。  
何とかが炭を売つて生活が出来るようになってきた。  
「邦彦の為にね」  
と妻が板戸をあけて雪解けの

「山から木を頂くばかりで雪崩がつく山にしてしまった」  
「植林をしましょよ」  
「うん。苗木を買おう。それに、熊には申し訳ないが……」  
弥彦は熊をじつと見つめて手をあわせた。すると、皮をはぎ肝をとった。肝は普通の熊の倍もある。弥彦は思った。  
「世話になった村の人たちに肉を分けてくる。熊も、きつと成仏してくれるだろう」  
妻は、優しく送り出した。  
弥彦は、その足で町へ行き皮と肝を売った。皮が一両、肝が七両で売れた。(これはすごい!)弥彦は、熊の命を無駄にせず。この銭で苗木を買つて植えよう。そして、山を美しく育てよう。動物も人間も住みよい山にしよう、弥彦は山守になろうと決めた。

春の空を仰いだ。その時、  
ドサツ、ドッガン!  
「炭焼き小屋だ……」  
弥彦は走った。  
「ひやあ! 雪崩だ!」  
小屋が雪で埋もれている。  
「炭焼き小屋が全滅だ!」  
弥彦はがく然とした。  
「火事の次は雪崩か……」  
「早く雪をどけましょ」  
「そうだな……」  
力なく弥彦は立ち上がった。  
辺りを見わたした妻が叫んだ。  
「邦彦がいませぬ。邦彦!」  
妻は叫びつづけた。  
「まさか、雪崩に!」  
弥彦は雪をかき始めた。  
雪の中に黒いかたまりが見える。(邦彦ではないか)夢中で雪をかき分けた。  
「おお、これは……」  
それは大きな熊の背中だった。  
雪崩と一緒に滑り落ちたのだ。  
熊は息が絶えていた。熊が、何かを抱きかかえるように背をまるくしている。弥彦が、ゆつくり上向きにすると「あつ」と声をあげた。  
「邦彦! 邦彦!」  
妻は泣きながら叫んだ。  
「大丈夫。氣を失っているだ」  
熊の柔らかい肌を守られたのだ。



その夜、夫婦は話し合った。  
「山から木を頂くばかりで雪崩がつく山にしてしまった」  
「植林をしましょよ」  
「うん。苗木を買おう。それに、熊には申し訳ないが……」  
弥彦は熊をじつと見つめて手をあわせた。すると、皮をはぎ肝をとった。肝は普通の熊の倍もある。弥彦は思った。  
「世話になった村の人たちに肉を分けてくる。熊も、きつと成仏してくれるだろう」  
妻は、優しく送り出した。  
弥彦は、その足で町へ行き皮と肝を売った。皮が一両、肝が七両で売れた。(これはすごい!)弥彦は、熊の命を無駄にせず。この銭で苗木を買つて植えよう。そして、山を美しく育てよう。動物も人間も住みよい山にしよう、弥彦は山守になろうと決めた。

(さし絵・小出 茂)

# 弘法大師 はなはな 句・菅谷秀文



絵・橋本豊治

# け 恵果和上より付法伝授さる

空海三十二歳、八〇五年(延暦二十四年)青龍寺によって、不空三蔵より金剛頂経密教を、善無畏の弟子・玄紹から大日経の密教を付法伝授されている恵果和上より付法伝授された。その時恵果和上六十歳であったという。(弟子は、千人とも二千人とも言われている。)空海は、密教の正統な後継者として大阿闍梨を与えられた。  
「報命つきなんと欲すれども、付法に人なし。必ずすべからく速やかに香花を弁じて灌頂壇に入るべし」  
胎藏界、金剛界、投華得仏は大日如来であった。これにより遍照金剛を名乗る事となる。この儀式三ヶ月間であった。空海が恵果和上に献上した御札の品は、五百貫文、袈裟、柄香鑪であったと言ふ。